

拝啓 今年も早や5月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、ヤマボウシの花がきれいに咲いています。

今回は、小西芳之助先生の『ガラテヤ人への手紙講解説教』からの引用の第11回目最終回です。今回のエンカウンターの7頁「第3 福音の効果」には、次のように書かれています。

### 「第3 福音の効果

「福音の効果」は、永遠の生命を頂くことであります。福音の実、目的は、我々に永遠の生命を与えること。受けたらどうなるかと言えば、神の子とされて、永遠の生命が与えられる、ということです。他の言葉で言えば、天国へ行くということ、福音を信じれば天国へ行く者となる、ということでもあります。これが目的です。この教会で福音を聞いて、自分はこの世の生活が終れば天国へ行く、ということが分かれば、この教会では卒業生。私は、それ以上を要求してはおりません。何をしてもよろしい。自分が天国へ行くことが本当に分かったならば、戦争に行くこともよい。戦争で人を殺すことは、私は嫌いですが、神の意思に沿っているとすれば、それもよい。それは本人に任せればよい。これが人格の自由であります。信者となったら、あれこれをせよ、しなければならない、というようなことはありません。各人の仕事は違う。学者は学問をする。実業家は事業をする、牧師は勉強したらよろしい。私はそう思います。学問も伝道も同じことです。」

小西先生は、「ロマ書は、説明的であり、どちらかと言えば、理論的な記述であるのに対し、ガラテヤ書は『信仰によって救われる』という一つの点、即ち、キリスト教の中心的な事実のみを捕らえた霊的な説明である。パウロが伝える福音の本質を理解するためには、ロマ書、コリント前・後書、と併せて、ガラテヤ書を勉強する必要がある。ガラテヤ書の全6章のどこをたたいても、一つの目的である、『信仰の自由』、『人格の自由』、『キリスト者の自由』が響いている。もしもこのガラテヤ書がなかったならば、キリスト教の福音の理解は、全く変わっていたであろう」と述べておられます。

確かにガラテヤ書は、ロマ書の先駆けをなしたような大切な手紙だと思えます。約1年かけて、ガラテヤ書の重要個所の引用を終えることが出来て感謝です。次号からは、『エペソ人への手紙講解説教』から引用いたします。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

### 小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』4月21日

#### 「恵心流キリスト教

私のキリスト教を「恵心流キリスト教」と言う。何故か。私は、キリスト教信仰の最も深いところを恵心僧都（源信）から学んだからである。

第1に、彼は教えていわく、「偏に阿弥陀仏の浄土を求めよ」と。故に、私は彼に学び、神の国（における我らの復活）だけを願う。

第2に、彼は阿弥陀仏の本願を信ずることを教え、かつ、念仏—阿弥陀仏の名を称える

こと一を実行することを勧めた。故に、私は彼に従い、イエスの約束（ヨハネ伝 3 章 14, 15 節）—イエスの十字架—を信じて、かつ、「わが主イエスよ」と呼ぶ（ロマ書 10 章 9, 10, 13 節）。

以上のことから、恵心流キリスト教は、次の 3 つのことから成り立っている。

第1. イエスの十字架の贖いを信じること。

第2. 我らの復活だけを信じること。

第3. 「我が主イエスよ」と呼ぶこと、即ち、口で称えること。

このうち、第3が最も重要である。それは、第3が実行できれば、第1も、第2も死んでしまうからである。」

（私の歌

主イエスと呼びて励まん 今日もまた  
手に来る業を 御国めざして)

#### 新渡戸稲造先生『一日一言』5月9日

「身の<sup>ほとり</sup>辺にある人々に尽くせば、それで結局は君のため、世のためになるもの。こんなつまらぬ仕事をしてと歎くを止めよ。目の前の義務は、一つ、二つ、十、二十、百千万と積もりて、国のためともなり、君に忠ともなる。骨を惜しまで今日の務めを全うすべし。」

#### 松下幸之助先生『続・道をひらく』「思いやる心」

「人と人とを互いのつなぐものは、お互いに相手のことを思いやる心。ちょっとしたことにも、思いやる心から泉がにじみ出る。そのうるおいがなくなったとき、人と人との間は、パサパサのポクポク。こまかいこまかい土の粒子のような、何のつながりももたない人間の寄り集まりになって、ちょっとしたことにも、個々ばらばらに舞いあがる。

どっしりした大地を支えるものは水。どっしりとした人間の共同生活を支えるものは、他を思いやる心。世の中がどんなに変わっても、お互いにこの心の泉までも枯らしたくないと思うきょうこのごろである。

#### 内村鑑三先生『続 1 日一生』5月10日

「キリストの十字架にキリスト教はある。十字架の道、これキリスト教である。キリスト教に他に何があっても、もしキリストの十字架がないならば、キリスト教はないのである。キリスト教は道德の道にあらずして贖罪の道である。そして贖罪は、十字架の上におこなわれたのである。キリストは人に人道又は天道を教えんために世に来たりたまいにあらず。人類の罪を負いてこれを除かんために来りたもうたのである。キリストの十字架に、この深い普遍的の意味がある。この意味において十字架を解して、聖書と人生を理解し得るのである。」

## パークレー先生『ウィリアム・パークレイの一日一章』（5月15日）

「不可欠のもの

クリスチャン生活をいきいきと保ち、クリスチャン生活に伴う義務を果たすためには、どうしても教会に出席する必要がある。

ほかの人たちと一緒に経験すると、いっそう価値と力を増すものがある。

礼拝もそうである。むろん一人で礼拝することも出来る。また一人で礼拝しなければならない時もある。しかし、一緒にやるのが礼拝の本質であるという事実には変わりはない。

キリスト教信仰は、個人的な経験であるだけでなく、また団体的なものであることを確信するのはたいへん大事なことである。」

あるZoomの会合で、生きがいを得るためにはフランクルの『夜と霧』という本を読むとよいということを知り、昔読んだことのあるこの有名な本を読み直しました。確かにそれは当たっていて、またこの本が読めたことから元気が出て、今度は、内村鑑三先生の『ロマ書の研究』という大著を読み始めました。まだ途中ですが、感銘深く内村先生の名著を読んでいます。

小西先生のCD頒布事業の最終回「年末所感・年頭所感」のうち、ある巻は聞きづらいという感想を聞いたので、確かめるため、「年末所感・年頭所感」全28講を聞いてみましたところ、それほど聞きづらい巻は無く、全般に素晴らしい内容の説教集であることが分かり、感銘を受けました。

新型コロナについては、だいぶ少なくなりましたが、電車の中とかスーパーでは、まだマスクをされている人がおられるように思います。マスク、手洗い、うがいなどは、必要と思われるときは実行されて、十分ご注意ください、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024年5月23日

山口周三

エンカウンターの読者各位